3 連携・協働による広域的な景観形成・保全の課題整理及び取組指針（案）の策定

3.1 風景づくりの仕組みづくりにおける課題の類型化

風景づくりの仕組みづくりにおける課題は、以下の 3 つに類型できる。

(1) プロセスの課題

各地の現状や勉強会で見てきたように、身近な場所に、様々な資源があるにも係らず、地域の人々がそのことに気付かず、取り壊されてしまったり、地域になじまない建物や構造物ができてしまったりするケースが見られる。

また、本物の資源が有する価値をさらに高める努力を怠り、利便性やコストといった目先の利益を求めたために、本物の価値を逆に下げてしまっているケースも見受けられる。

さらに、景観に関するマスタープランを作成したが、計画を作成することそのものが目的化し、その作成に住民等が係っていないため、住民の「地域づくりの方針」となっておらず、具体的な取組みが展開できないというケースも見られる。

こういった現状は、風景づくりの「プロセス」に問題があると考えられる。地域にとっても美しさとはなにか、身近にある資源にどのような価値があるのか、そしてそれをどのように磨き、活かしていくべきかといったことを十分に地域内で話し合い、将来を描くプロセスが必要である。

【プロセスの課題】

○地域住民自身が、地域の魅力やらしさに気付く必要がある。
○地域住民自身が、何とかしたいという思いを抱き、共有することが必要である。
○次の世代にどのように資源や風景を残していくのか、ビジョンを描く必要がある。

(2) 意識の課題

美しい地域づくりのための活動を点から線へ、線から面へと広げていくことによって、地域全体の風景が変わってくる。しかし、一部の住民しか地域の良さを理解していない、さらには、一部のリーダーのみが頑張っていて、地域住民に活動がなかなか広がらないといったケースが見られる。

また、その背景にはそのような活動をしても効果が見出せない、それは行政がやることであって自分達がすることではない、活動を続けていくことが大変である、といった住民の意識が大きく作用している。

【意識の課題】

○地域住民や関係者一人ひとりに、風景を守り、つくり出していくことの意義を理解してもらう必要がある。
○地域の資源に価値を見出し、それを高め自立した活動へと高めていく必要がある。
○一過性の取組ではなく、先を見据え活動を続けていく必要がある。

(3) 取組の課題

活動を始めたものの、だれがどのような役割を担えばよいのか、活動資金はどのように捻出すればよいのか、など現実的な問題に直面する。また、個々人が個別に活動を進めていて整合性が図れていないとか、複数の組織がバラバラに活動しており連携が行えていない、さらには関係機関との協議が進まないといった、体制面での問題、組織相互の関係性の問題も顕在化している。

こういった「人材」、「組織」、「資金」などの、具体的「取組」を進める上での課題への対応が求められる。

【取組の課題】

○動いているのは限られたメンバーばかりであり、それぞれの活動を展開していくにふさわしい人材を確保する必要がある。
○資金が限られている中においても、活動が動いていく仕組みが必要である。
○活動をより効果的に推進していくための体制作りが必要である。

3.2 多様な主体の役割分担と課題についての検討

多様な主体の役割分担の方法と課題について検討を行うため、現在、様々な活動、取組みにより成功している地域や施設などへのヒアリング調査を行う。

ヒアリングは、以下の活動家に対して、「プロセス」「意識」」「取組」といった 3 つの課題を特に注意し、インタビューを実施する。

ヒアリング調査先

テーマ	ヒアリング調査先の詳細			
お遍路・町並み	【高知県室戸市吉良川地区】 名称：吉良川町並み保存会 細木氏・ 室戸市教育委員会和田氏	【愛媛県内子町石畳地区】 名称：石畳を思う会 宝泉事務局長・ 岡田氏	【愛媛県愛南町】 名称：柏を育てる会 寿川氏・大森氏	【香川県東かがわ市】 名称：NPO 法人東かがわ市ニューツーリズム協会 大字理事長・ 赤澤事務局長
観光交流	【高知県黒潮町】 名称：NPO 法人砂浜美術館 村上氏	【香川県直島町】 名称：ベネッセアートサイト直島 笠原部長	【徳島県徳島市】 名称：新町川を守る会 中村理事長	
都市・中山間地域交流	【徳島県神山町】 名称：NPO 法人グリーンバレー 大南理事長	【高知県四万十川流域】 名称：株式会社四万十ドラマ 畦地代表	【愛媛県宇和島市】 名称：NPO 法人段畑を守ろう会 松田理事長	

3.3 取組指針（案）の策定

(1) 取組指針策定の目的

課題を抱える地域が風景づくりの活動を進めるに際して、「地域の魅力の再発見」から始めるための具体的コツやポイントを示すことが重要である。また、有名な観光地などの資源だけでなく、地域住民の人々が日常の生活環境にある魅力を発見し、それを地域の魅力として認識し、保存や育成していく取組みを始めることができるようにすることが大切である。

そのため、本取組指針は、風景づくりに係る活動がうまく展開されている地域の状況を「人」に着目し、以下の点が分かりやすく理解できるよう整理する。

- この指針を読むことによって、風景づくりの原則や手順を学ぶことができる。
- 風景づくりのより現実的な課題（たとえば、保全活動に必要な活動資金や人手の確保など）を抽出し、それをどのように乗り越えていくとよいかを、成功事例を交えて示す。
- 単なる施策アイデア集ではなく、各段階における「人の動き」に着目した内容とする。

こういった各地域の状況に応じてどのような活動を、どのような姿勢で行えば良いかを示す取組指針を取りまとめる。

(2) 取組指針骨子

各地域にて、風景づくりの活動を進めて行く上で発現する症状と、それに対する取組指針を一覧表で以下のとおり整理した。

プロセス

症状	取組指針
何から始めてよいかわからない	～1. 資源の良さを再発見する～
	■まずは、みんなで歩き、印象を語り合う
	○地域資源を見直す（見つめなおす）
	○みんなで勉強する
	○夜なべ談義（夢やアイデアを語る）をやってみる
地域のよさに気付いていない	■外の人の声を聞く
	○地域外の人の声に耳を傾ける（こちらから知ってもらう努力もする）
	○すばらしいといわれる地域の評判に接する
	○外国人の声を聞く
	■ものの見方を変えてみる
	○古くからの風習を見直してみる
	○素人ならではの自由な発想をしてみる
	○視点を変えてみる（視点を変えると価値観が変わる）
	○今まで捨てていたものを見直してみる
	○知恵を絞る
	○しっかりとした「考え方」「コンセプト」を持つ
	■暮らし（＝本来のよさ）を見せる
	○本来の地域の素材を活かす努力をする（引き算型のまちづくり）
	○地域の営みそのものが地域のブランドとなることに気付く
	○村人にとって何でもない風景を評価したことが始まり
	○自然の魅力を求めて人は集まる
何をするにも「難しい」という思いが先行する	～2. 思いを共有する～
	■小さな成功を目指し、喜びを分かち合う
	○達成感、成功体験を共有する
	○一つのことをやり遂げ、成功することで人はついてくる
	○みんなでイベントの復活を祝う
	■決して NO といわない
	○何かに取り組むとき、無理だとはいわない
	○大風呂敷を広げてみる
どうすればよいのか思いうかばない	～3. ビジョンを描く～
	■思いをひとつにした専門家とともに進めてみる
	○自分たちも専門家に思いを伝える集まりを開く
	○地域（住民・企業）の活動を行政のプランのなかに位置づけてもらう
	■オリジナルなビジョンを目指す
	○自分たちに何ができるかというところから発想する
	○ここ（地域、地元）にしかないものにこだわってみる

意識

症状	取組指針
地域のよさに気付いていない	～1．周りの住民の意識を変える～
	■根気強く対話する
	○一人ひとりに熱意をもって接してみる
	○まずは一人を口説いていく（膝を突き合わせて話をする）
	○土地柄を理解して根気よく対話してみる
	○そうすることの意義を何度も話あう
人頼み、行政頼みになっている	■自立（自律）の精神を育てる
	○企画段階から自分たちの思いを固めておく
	○補助金に頼らないなど、自律を第一とする
どう人を動かしてよいかわからない	■イメージを伝え、戦略的に発信する
	○人の心を動かすイメージ戦略を考える
	○高い評価を受けて、地域の自信と誇り、やる気を生み出す
	○イマジネーションを広げて、戦略的に発信していくことを考える
そんなことをやってどうなるのかといわれる 飯が食えるのかといわれる	～2．価値を考えてみる～
	■風景や文化でも飯を食える
	○ビジネスに結びつけることができることを説明する（10 年続ける覚悟も説明する）
	○ボランティアという意識ではなく、ビジネスという意識を持つ
	○負のものにも新たな価値があることを示す
	■自分たちの資源が持つ価値を意識する
	○地元の常識（日常）と外の人の非常識（非日常）の闘い
	○常に地域の資源に価値を見出す
	○子どもたちに伝える努力をする（次代に引き継いでいくことを考える）
活動が続かない 一部のリーダーが頑張っても地域住民にひろがらない	～3．活動を続ける楽しさを伝える～
	■苦しい時に支えてくれる仲間
	○単なる仕事にならないように、楽しむ感覚を持ち続ける
	○失敗や行き詰まったときに残る仲間が本当の仲間
	■10 年続ける覚悟で進める
	○10 年続けると見方がかわってくる
	○10 年を経て、受け入れられた「本気」
	■仲間を増やし、活動を拡大させる
	○小さな活動が大きな成果となり、連鎖反応を起こす
	○成長し続ける回路として歩み続けること
	○自ら守り、育てる活動の連鎖を生み出す
	○住民総出の協働が生み出したパワー
	○無理に強要しないのも継続のコツと心得る

取組

症状	取組指針
お金がない	～1．お金はめぐってくると信じる～
	■気持ちの交換を図る
	○他のもので代替できないかと考える
	○相手をよくしてあげようとする社会貢献の意識をもつ
	■お金がなくてもやりたいものをやる
	○補助金よりもソフトを磨き上げる
	○地域がよくなることが自分たちへの配当と考える
人づくりをどうすればよいのかわからない	～2．ひとづくりを第１に考える（さがす、つくる、呼び込む）～
	■資質の違うリーダーと補佐役を探す
	○地元とのパイプ役、行政とのパイプ役をさがす
	○情熱のある人を探す、相談できる人を探す
	■地域外のファンをつくる
	○地域外とのネットワークの仕組みを考える
	○外部からおもしろい人をひっぱってくることを考える
	○イベントを支える人（地域の外交官として活用）
	○地域外から訪れる人を増やす工夫（オーナー制度など）
	○インターンシップで学生（＝若者）を受け入れてみる
組織をどのように立ち上げればよいかわからない	～3．地元主体の組織をつくる～
	■中心的役割を担う事務局組織をつくる
	○運営の根幹に関ることは事務局で、各事業は中心人物に任せる体制をつくる
	○リーダーやメンバーがのびのび活動できる組織をつくる
	○団体や組織は一本化して強化する
	■主役は普通の人
	○地域で普通に暮らす人を先生に活用する
	○肩書きで人を選ばない
行政との付き合い方がわからない	～4．地域と行政の関係を築く～
	■地域と行政の役割を決める
	○できることできないことをきちんと踏まえる
	○持続的な活動のための仕組みを用意する（指定管理者制度などの活用を地域と行政で考える）
	■地域主導で行政と連携し活用する
	○地域の活動を行政がバックアップする関係を築く
	○情報と知識を一番持っている行政マンとつながる
周辺地域や他地域とどのようにすればよいかわからない	～5．連携しあうことで可能性を広げる～
	■連携によって活動を広げる
	○連携し合うことで発信力を広げる・高める

4 取組指針（案）に基づくフォローアップの実施

4.1 フォローアップ計画の作成

4.1.1 フォローアップ計画のねらい

地域の景観形成の実践に向けては、プロセス、意識、取り組みの課題への対応が求められる。すなわち、住民一人ひとりの景観に対する意識が低く、多様な主体の参加が得られていなかったり、また、具体的な取り組みの方法が分からなかったりといった実情から、景観づくりに向けた活動が必ずしもうまくいっていない地域への助言や支援が必要である。

そのため、取組指針に即した活動を四国全体で展開していくためのフォローアップ計画を検討する。

4.1.2 フォローアップの考え方

●フォローアップは、景観形成に取り組もうとする地域単位で行う。

●景観・風景づくりの主役である市町村及び地域団体を交えた地域検討会を開催し、活動の成功要因や失敗要因（どの様な行動や考え方がポイントになっているか）を分析する。

●分析に際しては、できる限り地域の人の動きや人間関係を明確にする。

●外観のみならず、農林水産業や商業活動など、そこで展開されている生活や経済活動に必ず目を向け、それらを維持・再生していくための方策（活動資金の確保など）を併せて議論していく。

●地域検討会は、以下のようなメンバーにて開催する。

・勉強会のテーマに応じた市町村（景観行政団体）及び地域づくり団体

・四県担当課（課長・係長）

・国土交通省　／　四国地方整備局関係部局及び各地域事務所

・アドバイザー　／　学識経験者

●フォローアップは、各地域での活動に対して以下のような手順にて実施する。

①外観のチェック　～まちを歩き、地域内外の視点から見る

②内面のチェック　～ヒアリングにより地域の暮らしぶりや営みを把握する

③取組指針との整合性分析

④将来を見据えた助言

●定期的なフォローアップの実施。

上記①～④のプロセスを、定期的（1～3年に１回程度）に繰り返す

4.1.3 フォローアップの実践

(1) 外観のチェック　～まちを歩き、地域内外の視点から見る

1) コースを決める

まち歩きのコースは、各自気になった点について写真などを撮影しながら約1時間程度でゆったり回れるコースとする。

コースは、主要な観光施設や地域で来訪者にお進めしたい風景・景観、地域として問題となっている風景・景観などを加えたものとする。

2) 見る視点を決める

地域の特性に合わせて以下のような視点を組み合わせながらまち歩きを行う。

- 地域に調和した風景・景観、地域に調和しない風景・景観
- 豊かな自然資源
- 眺望景観
- 地域の魅力、雰囲気づくり
- 地域の人々の活動、もてなしの心
- 案内機能、歩行者動線
- 商業施設などの魅力

3) 気付いた点を内部、外部両方の視点、そして専門的見地からそれぞれ説明する

見る視点を中心に地域内の人、地域外の人それぞれの感想を述べてもらう。

その結果、地域内外の人にとって魅力的、美しい風景・資源を抽出するとともに、地域内の人には魅力のないものが、地域外の人から見ると意外に魅力的であったりする資源や景観などを抽出する。

さらに、学識経験者や景観アドバイザーなどの専門的見地から、地域の歴史性や地形的特性などを踏まえた地域の外観のチェックをしてもらうことにより、地域資源を学術的見地より再点検を行う。

(2) 内面のチェック　～ヒアリングにより地域の暮らしぶりや営みを把握する

ヒアリングはプロセス、意識、取組という3つの視点を中心に以下のような内容について行う。

1) プロセスの視点からのヒアリング

- 今まで行ってきた地域の活動内容、活動の主旨
- キーパーソンとなった人物
- 地域活動のきっかけ
- 地域の課題として何があるのか、その課題に対してどのような活動を行ってきたのか
- 地域の課題を解決するために行った活動に対して、地域住民や来訪者からの評価

2) 意識の視点からのヒアリング

- 地域の風景・景観・資源に対する住民一人ひとりの意識
- 地域活動に対する住民の意識
- 地域住民の意識の変化があらわれたきっかけ

3) 取組の視点からのヒアリング

- どんな人がどの様な活動をしているのか
- 外部からの人材登用は
- 住民と企業、行政との協働
- 活動の体制はどうか
- 活動資金の調達方法は
- 成功にポイントは何か
- 今後の活動を行うに際して必要な支援は何か

(3) 取組指針との整合性の分析

プロセス、意識、取組の 3 つの視点を踏まえ、地域の現状・課題分析を行うとともに、取組指針との整合性の分析を行う。

(4) 将来を見据えた助言

1) 10 年先を見据えた目標設定

取組指針において、地域の活動に際して今後必要な取組を分析した結果から、10 年先を見据えた地域の目標の設定を行う。

地域の目標は、地域の良いところを更に伸ばし地域を活性化させていくものや地域の悪いところを修復し、より良い地域として発展させていくための目標設定に向けて専門的見地より助言を行う。

2) 次回フォローアップ時までの具体的アクションに関する助言

次回フォローアップの時期を決めるとともに、10 年後の目標も踏まえ、短期的、中期的にできる具体的なアクションを助言する。

4.2 ケーススタディの実施

地域検討会は、以下のような日程で開催した。なお、フォローアップは地域検討会の内容を踏まえ実施する。

開催日程

開催日時	開催地・会議室	分類		
		広域的（お遍路）	観光地域交流	中山間地域
平成 20 年 12 月 8 日 13:00～16:10	高知県梼原町ししまる地区 梼原町総合庁舎 2 階会議室 1			○
平成 20 年 12 月 9 日 8:00～11:00	徳島県三次市西祖谷地区 かずら橋夢舞台 会議室		○	
平成 20 年 12 月 9 日 14:30～17:30	徳島県勝浦町 ふれあいの里 さかもと 研修室	○		○
平成 21 年 3 月 17 日 13:00～15:30	愛媛県松山市道後地区 子規記念博物館 2 階会議室		○	

4.3 フォローアップの内容

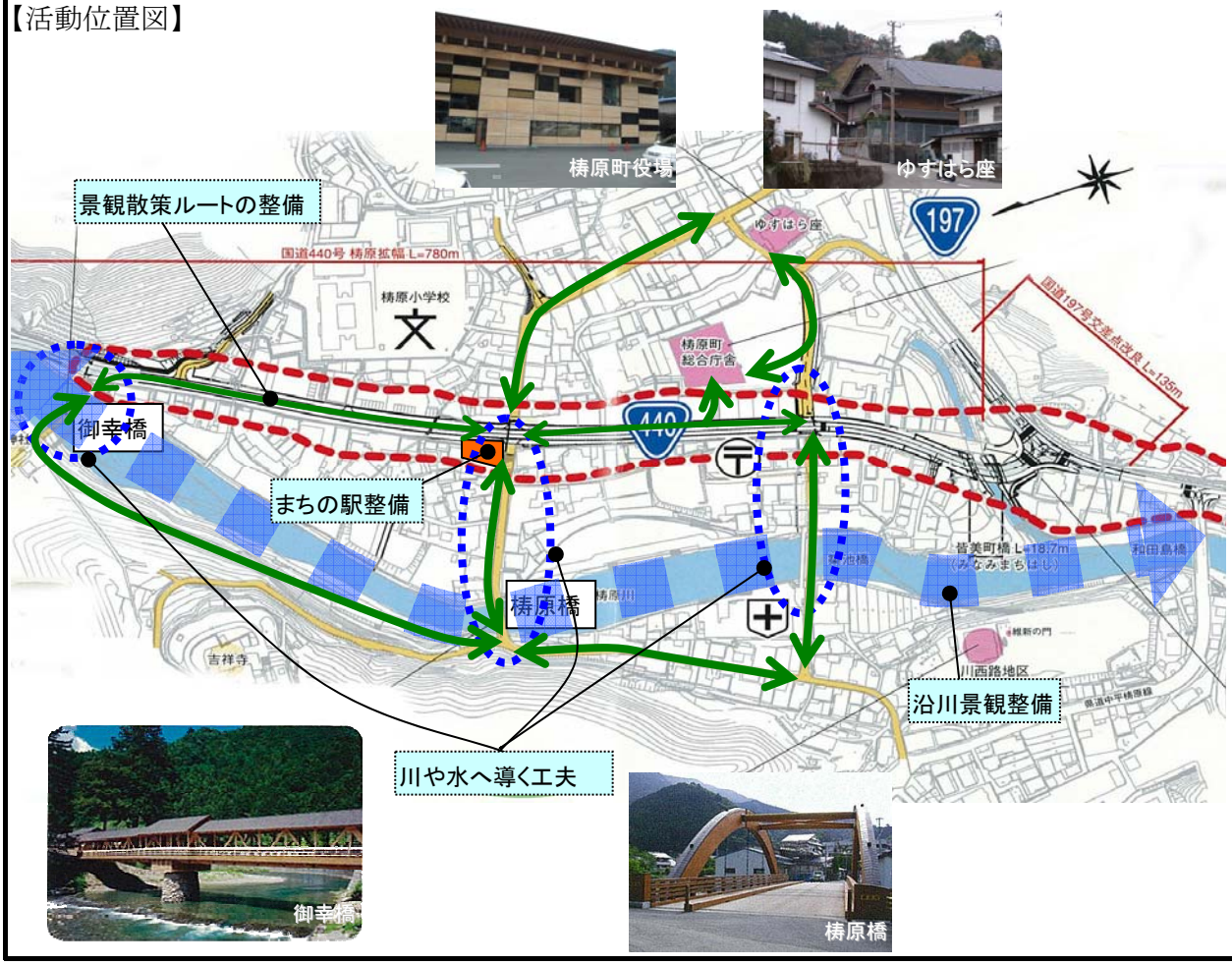
フォローアップ計画に基づき、4 地区において取組指針との整合性の分析、将来を見据えた助言をとりまとめる。

(1) 高知県梼原町ししまる地区

<table>
<tr><td colspan="2">取組指針との整合性の分析</td><td>● すばらしい四万十の源流に人を導く工夫が大事である。
● 水辺空間のひと工夫が求められる。
● 川があれば降りてみたいという気にさせる。川側からの眺めを気にすること、川べりの配慮が必要。
● 始点となる既存の駐車場をどう舞台装置にするのか、戦略が必要。
● 龍馬会の龍馬など、もてなしの心や演出、このようなガイドによるもてなしの工夫が好感を抱かせる。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">将来を見据えた助言</td><td>10 年先を見据えた目標設定</td><td><u>○「森林と水の文化」を未来へ継承する景観づくり</u>
住民一人一人の誇りと自信を育み、快適な生活空間と地域の活力を育む梼原の素晴らしい風景、伝統文化、それらが一体となった「森林と水の文化」を未来へと引き継いでいくための景観づくりを進める。
また、森林セラピーロードを歩き、梼原の魅力あふれる大自然を満喫し、環境への意識を向上させること等も進めていく。
<u>○日本最後の清流と言われる美しい景観が残っている地域を未来へ引き継ぐ</u>
四万十川流域5市町（四万十市・四万十町・中土佐町・津野町・梼原町）で連携し日本最後の清流と言われる美しい景観（永く営まれてきた生活そのものが景観）が残っているこの地域を未来へ流域住民が共通の理念を持って引き継いでいこう。という認識のもと取組みを進めており、重要文化的景観として、国選定文化財に答申された。
文化的景観が広域で選定されるのはわが国初ということで、これを契機に人と自然がつくりあげた景観を再認識し、農林水産業の活性化、地域コミュニティの推進、新たな生業を生み出す知恵の可能性を考え、未来への継承と全国に向けた発信に取組んでいく。</td></tr>
<tr><td>次回フォローアップ時までの具体的アクションに関する助言</td><td><u>○「森林と水の文化」を未来へ継承する景観づくり</u>
● ししまる地区にふさわしいまちの駅整備と町役場駐車場との接続整備
● 景観散策ルートの整備（四万十源流である梼原川への誘導、川沿景観整備）
● 景観計画の住民への周知
● 景観を守り続ける地域のリーダーとなる人材の育成、協力してくれる人の輪を広げる
<u>○日本最後の清流と言われる美しい景観が残っている地域を未来へ引き継ぐ</u>
● 重要文化的景観の選定を契機とした景観づくりへの PR の継続（広域的視点からの重要性 PR）
● 広域での来訪者誘致の仕組みづくり
● 全国・世界へ向けた発信方策の検討と連携
● 重要文化的景観の実践的保全に向けた取組の推進</td></tr>
</table>

取組	実施時期				
	1 年目	2年目	3 年目	4 年目	5 年目
ししまる地区にふさわしいまちの駅整備と町役場駐車場との接続整備					
景観散策ルートの整備（四万十源流である梼原川への誘導、川沿景観整備）					
景観計画の住民への周知					
景観を守り続ける地域のリーダーとなる人材の育成、協力してくれる人の輪を広げる					
重要文化的景観の選定を契機とした景観づくりへの PR の継続（広域的視点からの重要性 PR）					
広域での来訪者誘致の仕組みづくり					
全国・世界へ向けた発信方策の検討と連携					
重要文化的景観の実践的保全に向けた取組の推進					

【活動位置図】

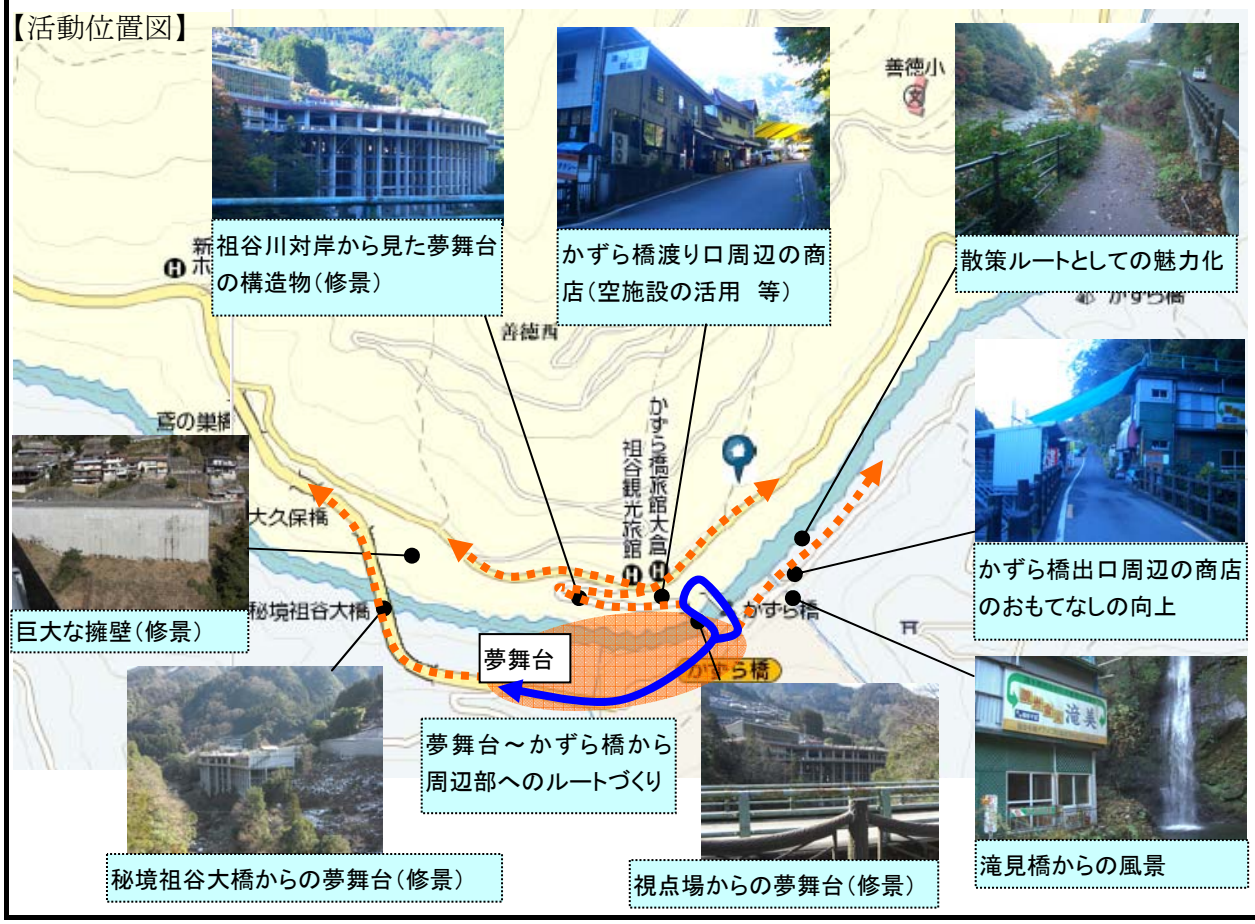


(2) 徳島県三好市西祖谷地区

<table>
<tr><td colspan="2">取組指針との整合性の分析</td><td>● 商品価値を上げるための周辺の景観づくりに力を入れることが重要。夢舞台・駐車場はかずら橋の風景に調和しない。
● 滝見橋から滝を見た時に見える看板で風景が台無しであり、店にとってもそこに看板がない方が良いのではないか。
● 景観のポイントが一つだけであり、もっと良いポイントを増やす努力が必要。
● 大歩危からの案内（看板）づくりが必要ではないか。
● かずら橋まで誘導する案内に統一性がなく、歩行者の動線が整備されていない。
● 回遊性をどのようにつくるか、範囲をどのように広げるかなど取組みが必要。
● 四季が魅力であり、長時間楽しむことのできるプログラムが必要。その際、地元の本物の素材を活かすべき。
● 秘境イメージと大衆イメージがあり、イメージの作り方が重要。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">将来を見据えた助言</td><td>10 年先を見据えた目標設定</td><td><u>○かずら橋のたたずまいにふさわしい風景の創出</u>
当地区は、かずら橋だけではなくその周辺も含めた「橋の風景」が観光対象のはずであるが、周辺には利便性を優先した、かずら橋のたたずまいに調和しないデザインの施設が立地し、橋の風景に奥行感がなくなってきている。
こうした事態を解消していくために、地域住民や事業者とともに、周辺施設や見所における修景の取組を進め、地区全体でかずら橋をより一層ひきたたせる風景を創出する。
<u>○かずら橋を拠点とした回遊性・滞在性の向上</u>
地区内でかずら橋以外に楽しめる場所が少ないため、見る・渡る以外の楽しみ方を提供できず、通過型の観光地になっている。
地域には平家の落人伝説や、伝統芸能、渓谷の四季の魅力があり、こういった資源を五感で楽しんでいただくことによって、回遊性や滞在性を高める。</td></tr>
<tr><td>次回フォローアップ時までの具体的アクションに関する助言</td><td><u>○かずら橋のたたずまいにふさわしい風景の創出</u>
● 夢舞台のデザインや沿道の看板など、風景上の問題点の共有
● 風景上の問題を緩和するための実験的取組（視界の遮蔽、植栽など）
● かずら橋のたたずまいにふさわしい風景を創出するためのルールづくり
● ルールに則した建物、道路、植栽などの整備の推進
<u>○かずら橋を拠点とした回遊性・滞在性の向上</u>
● 地域住民・事業者による地域資源を見直すためのワークショップ
● 各ポイント（道端、商店等）での新たな楽しみの魅力づくり（見る・渡る・味わう＋聞く、触る、香る　等）
● 各ポイントをつなぐルート、ツアープログラムづくり
● 回遊ルート上における案内機能や修景整備の充実</td></tr>
</table>

取組	実施時期				
	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
夢舞台のデザインや沿道の看板など、風景上の問題点の共有					
風景上の問題を緩和するための実験的取組（視界の遮蔽、植栽など）					
かずら橋のたたずまいにふさわしい風景を創出するためのルールづくり					
ルールに則した建物、道路、植栽などの整備の推進					
地域住民・事業者による地域資源を見直すためのワークショップ					
各ポイント（道端、商店等）での新たな楽しみの魅力づくり（見る・渡る・味わう＋聞く、触る、香る　等）					
各ポイントをつなぐルート、ツアープログラムづくり					
回遊ルート上における案内機能や修景整備の充実					

【活動位置図】



(3) 徳島県勝浦町地区

<table>
<tr><td colspan="2">取組指針との整合性の分析</td><td>● 町を東西に貫く勝浦川や県道は、河川区域や道路区域等植樹の際に管理者等との協議が必要。
● さくらをブランド化するには、その背景の物語が重要。
● 「前松堂」周辺に留まらせる工夫、空間整備が必要。
● ビッグひな祭りを起点に、周遊可能なメニュー作りが必要。
● 坂本地区の風景の良さを活かして、各家々が飾るひな人形を、来訪者へ見せる工夫等、厚みを増すことが考えられる。
● 坂本地区のみかん農家と自然の織り成す風景を活用するために、ビューポイントの設定や荒廃した民家などのしつらえを整える必要がある。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">将来を見据えた助言</td><td>10 年先を見据えた目標設定</td><td><u>○「夢ざくら」の移植を進めまち中をさくらで一杯にする</u>
増殖に成功した「夢ざくら」を町内各所へ移植し、まち中をさくらでいっぱいにする。さらに、「夢ざくら」の植えられている、和菓子屋「前松堂」周辺の修景整備とあわせて、さくらの延命処置の実施。
<u>○「ビッグひな祭り」を核にした周遊メニューの創出</u>
開催 20 回以上を数える「ビッグひな祭り」の新たな展開として、地域の伝統的な「ひな祭り」の様子を見ていただく。具体的には、地域のひな祭りに関する考証を行ったうえで、町内各所で当時の様子を再現し、イベント期間中のメニューとして組み込むことが考えられる。
<u>○「阿波貯蔵みかん」のブランド化</u>
かつて、全国に名を馳せ、町の基幹産業としても栄えたみかんの生産。早生のみかんを貯蔵し熟成させたうえで出荷する、「阿波貯蔵みかん」を、自然栽培や自然貯蔵・熟成の高付加価値型のみかんとして再ブランド化する。熟成には、坂本地区にある、廃屋となったかつての貯蔵庫を改修して用いる。これにより、生産放棄が進みつつある、町内のみかん畑の生産維持にもつなげる。</td></tr>
<tr><td>次回フォローアップ時までの具体的アクションに関する助言</td><td><u>○「夢ざくら」の移植を進めまち中をさくらで一杯にする</u>
● 町内主要施設周辺への「夢ざくら」の移植
● 県道や河川沿いの民地側への「夢ざくら」の移植（地権者の了解を得ながら）
● 「前松堂」周辺の修景整備
● 「夢ざくら」の延命処置
<u>○「ビッグひな祭り」を核にした周遊メニューの創出</u>
● 地域に伝わる「ひな祭り」の考証
● 地域の伝統的ひな祭りの公開（町内各所）
<u>○「阿波貯蔵みかん」のブランド化</u>
● 廃屋となったみかん貯蔵庫の修復・再生
● NPO 法人等が主体となったみかんの生産（町内各所）
● 「阿波貯蔵みかん」の販売戦略の検討・立案</td></tr>
</table>

取組	実施時期				
	1 年目	2 年目	3 年目	4 年目	5 年目
町内主要施設周辺への「夢ざくら」の移植					
県道や河川沿いの民地側への「夢ざくら」の移植					
「前松堂」周辺の修景整備					
「夢ざくら」の延命処置					
地域に伝わる「ひな祭り」の考証					
地域の伝統的ひな祭りの公開（町内各所）					
廃屋となったみかん貯蔵庫の修復・再生					
NPO 法人等が主体となったみかんの生産（町内各所）					
「阿波貯蔵みかん」の販売戦略の検討・立案					

【活動位置図】

(4) 愛媛県松山市道後地区

<table>
<tr><td colspan="2">取組指針との整合性の分析</td><td>● 自主的な看板撤去やファサード整備が進められているが、気になるものもある。
● 高い建物（マンション）が、道後地区からの眺望を遮っている。高さに関する規制が必要。
● 古い建物の跡が駐車場になっており、連続性に欠ける。
● 道後公園の魅力を高め、もっとPRしてはどうか。
● その他（放置自転車が多い、神社の駐車場が広すぎる）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">将来を見据えた助言</td><td>10 年先を見据えた目標設定</td><td><u>○道後温泉周辺を厚みのある歴史漂う界隈性のあるまちにする</u>
道後には古代から伝わる温泉の歴史があり、来訪者がこれら厚みのある歴史を感じられるまちづくり「歴史漂う界隈性のあるまち」をめざす。具体的には、『道後百年の“景”』道後温泉歴史漂う景観まちづくり宣言の内容に即した活動として、『伊予の湯桁』（源氏物語）、『聖徳太子行幸の湯』、『額田王』、『松平藩の温泉経営』などの歴史を現在に何らかの形で復元させる。
<u>○道後地区の各視点場から、松山城への眺望や通りの見通しを確保する</u>
道後地区は、松山都市圏の中で、住みたいエリア No.1 であり、マンションが立地しやすい地区である。しかしそれが、良好な眺望を阻害する要因となっており、現状ではそれを阻止する手立てがない。
マンションによる松山城への眺望の阻害、電線・電柱・看板等による見通し、雰囲気の阻害などを抑制し、外から見た景観（観光）と、内から見た景観（生活）の両方を調和させていく。そのために、守るべき景観や磨きあげるべき景観について、合意形成を図る。</td></tr>
<tr><td>次回フォローアップ時までの具体的アクションに関する助言</td><td><u>○道後温泉周辺を厚みのある歴史漂う界隈性のあるまちにする</u>
● 「伊予の湯桁」や「聖徳太子行幸の湯」等の歴史に関する情報の整理
● 復活すべきテーマ・物語の構築
● 歴史漂う空間づくりやサービスの復元（歴史まちづくり法の活用）
● さらに幅広い歴史資源の発掘と復元手法の検討
<u>○道後地区の各視点場から、松山城への眺望や通りの見通しを確保する</u>
● 眺望景観に関する勉強会の継続（地元と行政の対話）
● 道後温泉地区における視点場の設定
● 眺望景観、通りの見通し確保に向けた方針づくり
● 眺望や見通し確保に向けたルールづくり（景観計画・景観条例の策定）</td></tr>
</table>

取組	実施時期				
	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
「伊予の湯桁」や「聖徳太子行幸の湯」等の歴史に関する情報の整理					
復活すべきテーマ・物語の構築					
歴史漂う空間づくりやサービスの復元（歴史的まちづくり法の活用）					
さらに幅広い歴史資源の発掘と復元手法の検討					
眺望景観に関する勉強会の継続（地元と行政の対話）					
道後温泉地区における視点場の設定					
眺望景観、通りの見通し確保に向けた方針づくり					
眺望や見通し確保に向けたルールづくり（景観計画・景観条例の策定）					

【活動位置図】

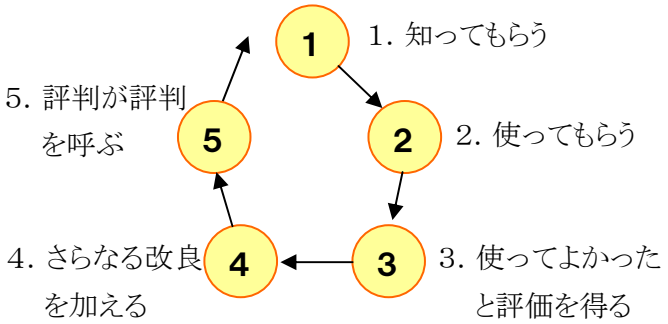
4.4 普及浸透策の検討

4.4.1 自治体や地域団体等への浸透に向けた取組み

(1) 浸透方法

取組指針を浸透させていくためには、以下のようなスパイラルアップのステップが考えられる。

1．知ってもらう
2．使ってもらう
3．使ってよかったと評価を得る
4．さらなる改良を加える
5．評判が評判を呼ぶ



1．知ってもらう	**①多彩なメディアを活用し取組指針の PR をする** ● まずは、取組指針を掲載した HP によっていつでも情報アクセスができる状況にした上で、プレス発表、広報誌への掲載等情報 PR を行うほか、地域活動の会合時に参考資料として活用いただく等のルートを用意する。（地域活動の会合自体もひとつのメディアと捉える） ● 各県内のまちづくり NPO 団体等について、ルートを通じて積極的に取組指針を PR する。
	②モデル地域が先導的に口コミ PR を行う ● モデル地域が先導的に口コミ PR を行うほか、モデル地域のキーマンがスポークスマン（広報宣伝係り）となって活躍していただくことを想定する。
2．使ってもらう	**①各県担当者が率先して活用の手本を見せる** ● 各県から県内自治体に取組指針を PR するほか、相談を受けたときに、取組指針を参考書（処方箋）として、課題解決を図る。
	②取組指針を活用した勉強会、ミニフォーラム等の開かれた場の提供 ● 取組指針は作成されて終わりということではなく、なるべく多くの地域の方々で議論していただくことが重要であるため、風景づくりに向けて、地域の方々が参画しやすい開かれた場を設ける。 ● 場づくりについては、モデル地域のキーマンによる取組指針を活用した勉強会や、キーマンがファシリテーターとなるワークショップやミニフォーラム等を開催する。 ● 各県及び市町村においても、取組指針を紹介するだけでなく、取組指針をテキストとした風景づくり講座を開講する等、活用の機会・場を設ける。

３．使ってよかったと評価を得る	**①意見把握のための多彩な仕組みを用意する** ● 取組指針を活用してもらう中で、地域の方々の意見や評価を汲み取る仕組みを構築しておくことが重要であるため、上記の勉強会やワークショップ、ミニフォーラム等での意見交換・評価、IT・WEBを活用したアンケート・モニター評価、個別のインタビュー、ヒアリング等の実施を図る。 **②良好な評価を得る仕組みを用意する。** ● 上記の具体例として、取組指針を紹介した HP 上に掲示板等の口コミ情報を掲載し、取組指針を活用した場合の評価を得る等を定期的・恒常的に実施していく。 ● この際に、単なる意見把握だけであると、評価が向上しないため、地域の悩み相談や課題解決に向けての助言などができるような場や機会、掲示板やメール等相互連絡できる仕組みを設けるなどで、総合的な評価を上げていくシステムとして展開する。
４．さらなる改良を加える	**①地域の声を聞く仕組みを確保することで、取組指針のさらなる改良を図る** ● どのような地域で、どのような課題を抱えているのか、取組指針をどのように活用して、さらにどのような助言を求めているのか等細かな状況を把握することによって、取組指針の持つ強みや価値を旋回軸として、さらなるブラッシュアップを図る。 ● モデル地域や先進事例もさらに増強することが想定され、時代や地域のニーズに応じた地域事例が増えることにより、課題解決に向けた情報量がアップするとともに、普遍的な課題解決の方向はより普遍性を増すものと想定される。 **②取組指針のスタイルの転換も想定する** ● 一冊の完結した書物としての取組指針としての形態は、普遍ではなく、地域ニーズや今後の改良する頻度やニーズに応じて自由に変更・転換していくことが想定される。 ● 取り組み事例の増加や古くなった事例の見直しなどを想定すると、加除式の冊子とすることや、IT・WEB 上でどんどん更新していけるもの、さらに、Linux のように、ユーザーが自由に改良できるような仕組みを用意することも想定される。
５．評判が評判を呼ぶ	**①取組指針をもとに、風景づくりの取組を維持管理・発展させていく** ● 風景づくりに向けた取組を維持管理・発展させていくことこそが、真の風景づくりであるとの認識のもと、地域の活動や人づくりの活動の支援を継続し続けることで、取組指針のみならず、風景づくりそのものの評判・評価も向上させていく。 **②知ってもらうことのさらなるバージョンアップを図る** ● 多彩なメディアを駆使した PR や開かれた場の提供による PR や意向把握を継続することによって、PR の有効性を検証し、有効性の高い PR 方策について重点的な展開を図っていく。 ● また、一方通行的なPRではなく、双方向での情報の行き来ができる仕組みを確立することで、自然に PR 等、情報伝達が行われるようにする。 ● モデル地域支援を国や県及び市町村がし続けるのではなく、地域主体の自主的な風景づくりの組織展開が図られることを理想とする。

(2) 交流会による浸透

1) 交流会の開催概要

モデルプロジェクト各地区の活動の現状及び今後の活動方針等の紹介等を行い、他の地区の活動や課題について状況を共有し、それぞれの今後の活動の参考とする交流会を開催した。

日時	平成 21 年 3 月 25 日（水） 13:00～17:00
場所	徳島県徳島市 ホテル グランドパレス徳島 3 階 グランドルーム
内容	1.開会挨拶　国土交通省四国地方整備局 企画部長 小池 剛 2.基調講演 「美しい四国」 羽藤 英二（東京大学都市工学科 准教授） 「景観の保全・存続とNPO法人の係り」 松田 鎮昭（NPO 法人段畑を守ろう会 理事長） 「人をコンテンツにした美しい地域づくり」 大南 信也（NPO 法人グリーンバレー 理事長） 3.風景づくりの取り組み紹介 ・風景づくりに係る活動紹介 ・モデルプロジェクトの紹介 4.パネルディスカッション コーディネーター 羽藤 英二（東京大学都市工学科 准教授） パネリスト 真田 純子（徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部） 松田 鎮昭（NPO 法人段畑を守ろう会 理事長） 大南 信也（NPO 法人グリーンバレー 理事長） 中村 英雄（NPO 法人 新町川を守る会 理事長） 高橋 史 （NPO 法人東かがわ市ﾆｭｰﾂｰﾘｽﾞﾑ協会 事務局） 小池 剛 （国土交通省 四国地方整備局 企画部長）
交流会の様子	
参加者	約 90 名

4.4.2 広域的な景観形成に向けた情報発信

広域的お遍路文化を活用した風景づくり方策についての取組指針に関しては、四国地方整備局の WEB サイトを活用して、以下の内容の情報発信を行う。

- モデルプロジェクト、勉強会等の開催状況
- 交流会の開催状況
- 取組指針

5 本調査の結果と期待される効果

5.1 本調査の結果

本調査では、人口減少や高齢化によりかつての活気や景観が失われつつある遍路道を軸とする周辺地域を中心として、「お遍路及びモデル地域の現状調査」「連携・協働による広域的な景観形成・保全の課題整理及び取組指針案の策定」「取組指針（案）に基づくフォローアップの実施」を地域との意見交換や地域検討会、風景づくり交流会を踏まえ検討した。

その結果、多様な主体による活動推進に向けた課題について、以下のプロセス、意識、取組といった 3 つの視点から整理することができた。

【プロセスの課題】

○ 地域住民自身が、地域の魅力やらしさに気付く必要がある。
○ 地域住民自身が、何とかしたいという思いを抱き、共有することが必要である。
○ 次の世代にどのように資源や風景を残していくのか、ビジョンを描く必要がある。

【意識の課題】

○ 地域住民や関係者一人ひとりに、風景を守り、つくり出していくことの意義を理解してもらう必要がある。
○ 地域の資源に価値を見出し、それを高め自立した活動へと高めていく必要がある。
○ 一過性の取組ではなく、先を見据え活動を続けていく必要がある。

【取組の課題】

○ 動いているのは限られたメンバーばかりであり、それぞれの活動を展開していくにふさわしい人材を確保する必要がある。
○ 資金が限られている中においても、活動が動いていく仕組みが必要である。
○ 活動をより効果的に推進していくための体制作りが必要である。

また、「お遍路・町並」「観光交流」「都市・中山間地域交流」の 3 つのテーマに即し、活動の先進地域に対する事例調査を行うことにより、「お接待」、「普請」という四国圏固有の地域文化を保全し利活用するための、多様な主体が参加する実践的な「取組指針（案）」を策定した。この取組指針は、風景づくりの原則や手順を学ぶことができるものであり、風景づくりのより現実的な課題を抽出し、成功事例をもとにその課題をどのように乗り越えていったかを示すとともに、単なるアイデア集ではなく、各段階における「人の動き」に着目した内容のものとしてとりまとめを行った。

さらに、ケーススタディとして、四国八十八箇所霊場の遍路道周辺からモデル地域を選定し、具体の風景づくりに関する実情把握と、取組指針に基づく活動のフォローアップを行い、観光資源としての魅力の向上や地域づくりの支援検討を行った。

5.2 期待される効果

国、地方公共団体、地域住民等においてこれまでに個別で取り組まれていた活動実態が整理・把握されるとともに、地域へのアンケート及びヒアリング調査により、良好な景観や地域の歴史・文化・伝統の喪失といった現在の問題と、対策を講じなければ良好な景観等に影響を与える潜在的な問題が抽出され、問題が発生している背景や要因が体系化された。

そのような実態を踏まえた上で、四国各地における景観・風景づくりの気運を高め、行動・活動を促進していくための「取組指針」が策定された。

四国圏では、お遍路文化に根ざした「お接待」「普請」と呼ばれる地域文化があり、これまでもお遍路道周辺の景観等の維持や保全において大きな役割を果たしてきた。また、これらの地域の活動は、四国におけるまちやむらの美しい景観保全の基盤としても重要な役割を果たしてきた。

これらの地域性を活かし、四国圏広域地方計画においては、「美しい風土を形成し、地域の魅力を高める」こと、「歴史・文化的資源を継承し、地域の独自性を発揮する」ことが今後の戦略として位置づけられており、官民が連携して推進する仕組みづくりが重要課題とされている。また、「四国霊場八十八箇所とお遍路文化」を核とした地域振興プロジェクト等の推進については、四国霊場八十八箇所と遍路道を軸とする周辺地域の広域的な文化的景観形成と計画的保全が四国圏共通の重要な課題として認識されている。

そのため、この「取組指針」によって、文化的景観の形成と計画的な保全を推進する現場で抱えていた、景観形成の方針についての関係者合意や人材育成、活動資金制度等の推進体制の確立について、現実的な解決策を提供できることになる。特に、住民や民間企業は、広域的なつながりを持った活動には関心があるものの、具体的な関わり方、進め方がわからないという状況であり、「取組指針」の先進的な取組事例を通じて取組の仕組みづくりを学ぶことによって、広く官民が連携協働した計画的な取組の重要性を知り、広域的な活動を推進することが可能となる。

その結果、本調査により形成される協働の取組みづくりにより以下のような成果が期待できる。

- 四国八十八箇所霊場の遍路道周辺の地域の観光資源としての魅力の向上や地域づくりが進展し、交流人口の増大が図られるとともに、四国全体で効率的効果的な地域づくり等が展開される。
- 民間企業、住民等の景観、風景に対する意識の醸成が図られ、景観形成への理解が向上することとなり、景観法に基づく景観計画の策定など自治体の取組が活発化する。
- 「お接待」「普請」という四国圏固有の地域文化が、多様な主体の間で具体の活動を伴う形で広まる。
- お遍路道を軸とする周辺地域における具体的な景観づくりをモデル事業として推進することができる。

↓

- 最終的に、四国 4 県が「四国は一つ」を合言葉に協働で提案し、取組む「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産登録についても重要な活動の基盤づくりとして期待できる。

なお、今後、当取組指針に基づく活動を、以下のような各種会議等を通して浸透させ、継続的にフォローアップを行うことによって、遍路道を軸とした周辺地域において、実践的な風景づくりを行う地域・団体が拡大していくことが期待される。

- 四国各地域における景観保全に関する検討会議（フォローアップ）の開催
- 遍路文化に関する検討会議の開催
- 遍路道を通じた地域連携による環境整備の検討
- 有識者やＮＰＯを含めた活動報告会議を開催